

せつちゃん

昭和四十一年に田舎の高校を卒業し、親元を離れ関西圏の大学に進学した太田は、自由あふれる学生生活を謳歌していた。

太田は学業のかたわらアルバイトもしたが、当時流行り出した人気の家庭教師はやったことがなかった。相手の子供の学力を上させることに自信が持てなかった。その代わり太田は高一の時、当時あった軽四輪運転免許を取って、その後普通免許も取ったので、運転経験は十分に自信もあったから、車運転のアルバイトには積極的だった。何より運転のアルバイトは日給も高く割が良かった。

それで、太田はパン会社のクリスマスケーキ製造繁忙期の車の運転とか、運輸会社のお中元・お歳暮の配達とかをやった。そのバイトの期間は学校を休むことになるが、友達同士の代返やノートの貸し借りで何とか凌ぐことができた。

クリスマスケーキ工場の運転バイトは、同乗するバイトと共にケーキ箱等の資材を倉庫から工場へコンテナトラックでピストン輸送する仕事だった。初日に、同乗する学生バイトから「俺に運転させてや」と言われて、させたら木にぶつけて車が凹み、二人とも大目玉を喰らった。その同僚バイトが全くの運転初心者だったとは思わなかったが、勝手に運転させてしまった太田の責任だ。幸い会社から「修理代を払え」とは言われなかった。

太田が朝、ケーキ工場に行つてその同僚バイトと外で日向ぼっこしながら始業を待っていると、「おはようございます」と彼等に気持ちよく挨拶して一人の女性がいつも出勤して来る。ケーキ作りの労働者は何十人もいたが、その人は特に礼儀正しい人だから、同様に礼儀正しい太田も意識して丁寧に、「おはようございます」と返していた。

すると昼休みに、その人が「外は寒いから私の車に来ませんか？」と言つて太田達二人を誘つてきた。ついて行くと、サニールのバンにもう一人の女性が乗っていて、簡単に自己紹介をし合つた。

彼女達は工場近所に住む同級生で、農家の主婦で農閑期のアルバイトに来ていた。

太田達は学生然としていたとおり「学生バイトです」と紹介した。

もう一人の女性が、「せつちゃんは美人やからやつぱりついて来たね」と太田達をからかった。

せつちゃんと呼ばれたその女性はいたずらっぽく笑つて、「そんなことないよ」と言った。太田は、好奇心旺盛で自信のある積極的で魅力的な女性だな、と思つた。

十九才の太田達とは十才上の二人の話は、主婦の日常生活のとりとめのないもので、彼等学生の話は彼女達には非日常のものであった。お互い異世界の事で驚いたり笑つたりと昼休みの暇つぶしには最適だった。彼女達は持っていたガムやチョコレートを彼等にくれたりした。

たった一週間だけのアルバイトだったが、昼休みの“お話し会”は三、四回あり結構親しくなった。

ケーキ製造最終日のクリスマススイブは、太田と同僚の資材運搬班は工場から二キロほど離れた資材倉庫の後片付けがあったので、一時間程の残業になった。

太田達が工場に戻ると、労働者は皆帰ってしまった。太田は、“せつちゃん”に「お陰で工場に来るのが楽しかった。元気でね！」と最後の挨拶をしたかったのに、できない事がどういふ訳か無性に残念だった。もう二度と会うことはないから、そう言って、握手くらいしたかったのだ。

すると突然、彼女が暗闇から出て来て、「終わったの？」と言った。

太田はビックリして「ウン、やっ」と言うと、

「車で送って行きます」と太田に向かって言った。そのために待っていてくれたのだ。

同僚は方向が違うから工場が手配するタクシーで帰ればいい。

同僚は「あの奥さんアンタに気がありそうやな」と言ったことがある。

太田の好意がテレパシーで彼女に通じていたのだろう、全く思いもかけないドンデン返しのみさかの“送ってもらう”展開に太田はどういう訳かとても嬉しかった。

クリスマススイブの道路は大渋滞していて、車で普通二十分の道のりが一時間以上かかった。渋滞は誰でも大嫌いだ、太田はこ

の時ほど渋滞が好ましいと思ったことはなかった。もっと大渋滞になれば、と願った。

車内で喋る主役は彼女で、太田は聞き役、互いに相手に興味が
あり質問もあるから、会話は弾んだ。

「今日は工場直売のケーキを買ったので、親戚に届けるから、
どうせ遅くなる」と彼女。バンにケーキが数個積んであるのが見
えた。

そしてとうとう太田のアパートに着いた。

太田は何か心残りが強かったので勇気を出して、

「上がって、お茶でもどう？」

やんわり断られると予想したが、

「いいの？ 学生さんの部屋はどんなか興味ある」

「いいに決まってるやん」

部屋に入ると、

「わー、几帳面に片付いてるやん！」と彼女は無邪気に言った。

四畳半の学生アパートで小さい炬燵に向かい合って、太田が淹
れたお茶を飲みながら他愛のない話を続けようとするが、二人は
少し緊張しだした。初めてまともに向かい合うと、年上女性の多
少の威圧感の中にも可愛さと清楚さがある、と太田は思った。

太田がテニスのクラブ活動や旅行に行った話をする、
「学生さんは自由でいいわね」と言う。

彼女の話によると、関西圏では大阪万博開催決定以来土地ブ
ムが起こっていて、農家は莫大な土地資産を持ち、売りさえすれ
ば、大きな金が転がり込む。それで働き者の夫は気が大きくなり、

パチンコに熱中しだし、農閑期の冬は家にいないことが多いらしい。パチンコはプロ級になり、儲けた日は飲み屋に行つて帰りが遅くなるらしい。そのことに当然彼女は強い不満を持っている。彼女夫婦には子供は二人いるが、近所に住む義父母が今は面倒をみてくれているらしい。

彼女は夫に対する不満まで漏らしたが、大方は幸せな家庭生活の話が中心で、ありのままを話しているから、太田は信用されている気がした。一方、太田は無口な方で、生活に不満もないから、ヤツパリ聞き役が主だった。

話せば話す程、お互いの好意は深まって行く感じがした。でも、ここにいる知り合つて間もない十九の無知な学生と十才年上の主婦の間には当然何も起こらないし、起こせない。

主婦は学生サンと違つていつまでも夜自由ではない。

「じゃあ、ボツボツ帰るわね」

太田は心残りが更に増してきたので、さつき思いついたばかりのことを、こんなことを言つていいのかと心臓をドキドキさせながら口にした。

「よかつたら都合付けて一月の最期の日曜日にもまた来てよ。ドライブ何かどうやる？」

彼女は予想外という顔をして、少し考えてから、

「分かった。都合がついたら来ます」

太田にしてみればこれよりいい返事はない。(人妻をデートに誘つているという背徳感はあるが)

太田は未だ十九で成人式は再来年だ。

一月のその日曜日、約束の時間の十時になっても、十一時になっても彼女は来ない。

そりゃあそうだよな。主婦の分別からしたら当然だわ。大いに期待して、ドライブしたらどうしようとか色々なことを妄想して待っていた太田はバカバカしくなってきた。

太田は炬燵でフテ寝と決め込んだ。

ウトウトしていると、ドアをノックする音が聞こえた。もしかと思ってドアを開けると、近所の見慣れた小学生だった。

「駐車場でオバサンが呼んでるで」

駐車場へ行ってみると、あのサニーバンの横にせつちゃんの子供を抱いて立っていた。

「遅れてゴメン、ドライブはできへんけど昼ご飯作って来たから一緒に食べよ」

「これは三才の次男です」

「無理しなくていいのに、俺が無理言って悪かった」

ご飯は本格的な大量の赤飯と総菜とタツパで作った巨大プリンだった。三人で美味しく食べた。

「残りは夕ご飯で食べてね」

次男はヤンチャで狭い部屋でも動き回るから母親は大変だ。

彼女は、

「二十で結婚して、長男はもう八才だから今日は友達と遊んでます」

次男は満腹になると寝てしまった。

「ドライブに行きたかったけど、仲良くなり過ぎるとアカンから、この子連れてきた」と彼女は率直に言った。

「そんなことあらへんよ」と太田は意味不明なことを言ったものの、子供を連れて来たことには驚き、少しガツカリした自分がいた。

太田は彼女の意味することは理解できた。“ドライブ”の真意が太田のそれと一緒にようだった。

「また連れて来てよ」

彼女は首を横に振った。

「もう連れては来ない」の意か、「もう来ない」の意かは、定かではなかった。

「太田さんは歌は好き？」

「嫌いではないけど・・・」

「私の好きな歌があるから下手くそで恥ずかしいけど歌うね」
千昌夫の『星影のワルツ』だった。「君のために別れます」の

歌詞。

太田はまた会いたいのもうお終いらしい・・・

でも何だか潔く、清々しく、太田は感動した。

太田は十才も年上の女性と好意以上のものを抱き合ってしまった。でもそれが人妻であればそれ以上は叶わない。太田の方が立場が軽いから、従って考えが甘い。

太田は、早い内にケジメを付ける彼女の意地を感じた。後で西田佐知子の歌『女の意地』という歌詞にも彼女の気持ちがあるな、と太田は勝手に解釈したりした。太田も男の意地を示さないとな、と思った。

出会いとは不思議なものだ。あのケーキ工場でクリスマスのアルバイトをしなければ、お互い一生知らない者同士だった。ただの「おはようございます」の挨拶から始まった相手への関心がきつかけだった。

ちっぽけな出会いだが心に残る出会いだ。でもお互いの年齢のタイミングと立場は全く良くなかった。それ以上発展しようがない、発展してはいけない出会いであった。

クリスマスイブのあの夜、太田が「また来てよ」なんて言ったから、お互い相手のことを、次のことを意識し過ぎていた。この一か月で心は勝手にドンドン進んでいた。次に二人で会えば行動が進んでしまうだろう。

この状況で圧倒的に不利な立場は彼女の方であり、彼女の意味（分別）は尊重しなければいけない、と太田は思った。

「太田さんは三十くらいまで独身で、色々経験して、ゆっくり結婚したらいいよ」

彼女は太田の将来のことを勝手に心配してくれている。自分は二十の早過ぎた結婚だったと思っっているようだ。

方や太田は相手のことは何も心配してあげていない。

太田は純な気持ちから、

「俺に女の子が生まれたら、せつちゃんの名前を付けるよ」と唐突に言うと、

「昔風な名前だから止めときなよ」

自分の名前を付けられるなんて、とても重たいことだろう。このちっぽけな出会いが原因であればなお更だ。でも太田はそうし

ようと漠然と思ったのだ。太田は自由だから自分の事は自分で自由に決められると思った。

太田は、匿名の異性にして年賀状のやり取りをする約束にしてもらった。太田は何とも未練がましい。

最後、車に乗る時握手をして、お互い「さようなら、元気でね！」と言った。

彼女は振り返ることはなかった。とても潔よくカッコよかった。将来、ああいう人を見つけて結婚すればいいんだな、と太田は思った。

せつちゃんからの年賀状には、いつも近況が簡単に綴られ、異性の匿名にする必要はないから、「姉より」と最後に記してあった。姉のいない太田には新鮮で嬉しかった。

太田が妻と結婚したのは三十才の時だった。せつちゃんにアドバイスされた通りの歳だ。

太田がせつちゃんに年賀状（異性の匿名）で自分の結婚を知らせると、もう向うから年賀状は来なくなった。“星影のワルツ”をまた歌っているのだろうか？

それから四年後、太田夫婦に元気な女の子が生まれた。

あの時（十五年前）に発想した女の子が生まれたら名付けようと思っていたせつちゃんの名前は、妻からは「古い」と訝しがられ、一蹴されてしまった。熟考の末、新しい系の名前をつけた。

でも、太田にはせつちゃんとの甘酸っぱい思い出が偶に爽やかに蘇り、いつも温かい気持ちになる。